

B.LEAGUE × まちづくり



おすすめ
子育て
福祉
農業
行政課

秋田県で“初”、『国内のプロスポーツチームでも初』となる 常設のこども食堂

誰でも安心して過ごせる 第3の居場所事業

県民球団として 企業を巻き込むチカラ を活かし持続可能な活動に

未来を担うこどもたちを中心とした さまざまなカタチの支援



「みんな」で育むテーブル
テーブルを「みんな」で囲み、食事をすることで、こどもたちの「おいしかった！」「たのしかった！」の笑顔を作り、居場所となることを最大の目的としています。

日替わりメニュー
メニューは毎日日替わりです。地元秋田で採れた新鮮な素材を使い、みんなが笑顔になれるようなごはんを作っています。




みんなのテーブル（こども食堂）
秋田ノーザンハビネッツ

#こども食堂 #居場所づくり #ひとり親世帯支援 #持続的な社会課題解決

Keyword !



特徴

秋田ノーザンハビネッツと共に、地域全体で支えあい
温かく見守るこどもたちの第三の居場所

「企業を巻き込む力」を
地域で支えあう力に

パートナーからの食材寄付（豚肉）を、県内のこども食堂へ順番に無償で提供。
これを仕組化することで、持続可能なこども食堂運営を支える

他事業とのエコシステムを構築

①クラブ他事業のバン運搬時の納品BOXを活用し規格外野菜を集荷
②産業廃棄物を畑の肥料として再利用し、野菜を育て食材活用

「辞めぬい覚悟」で持続的な運営を継続

地域のひとり親・未来を担うこどもたちを食事を通してサポート。
地域やスポンサーとの連携など、活かせる仕組みを活用しながら事業を継続

実現までの課題・失敗談

- 利用者への周知**
ひとり親等の対象世帯へ、情報周知することが難しく、自治体との連携が必須だった
- エコシステムの構築**
安定的に運営を行うため、規格外野菜等の食材寄付を集め、集荷や再配分ルートを確立するまでに一定の時間を要した
- 専門人材の確保**
飲食を伴う事業のため専門スキルが必要となり、プロスポーツチーム運営とは異なる採用が必要。またボランティアのサポートも必要



ヒトを動かすチカラ

試合会場では対戦相手のファンからも食料寄付があり、多くの人の心を動かす活動に



B.CLUBが発揮するチカラ

企業を巻き込むチカラ

全25社もの企業から協賛や食料寄付などの継続的な支援を獲得。持続性を確保



現時点での成果

- ひとり親世帯の利用者数増加
オープンから12,528人（4,892組）が利用（24年9月末まで）
- 県内のこども食堂数の増加
2年間で22カ所から33カ所に増え、「あきた子ども応援ネットワーク」との連携を通して、これまで10,000点以上の食糧支援を届けた
- 広がる支援の輪
運営支援企業25社。350を超える個人団体からの寄付があり、持続可能な運営体制が構築



ビジョンの仮説構築

課題先進県で広がるひとり親世帯の収入格差

- 車社会の秋田県で維持費等により、食費が切り詰められ栄養不足のこどもの存在を知る
- スポーツクラブの管理栄養士が、健康であるための食事を提供することはできないだろうか？



ビジョンの構築・共有

県民球団として“地域のハブ”となり、秋田の未来づくりに貢献

- こどもたちの笑顔を中心とした地域コミュニティを築く
- 全てのプロスポーツチームが模倣できるように「みんなのテーブル」をモデル化する
- その他のこども食堂で持続的な運営が可能になるよう、秋田ノーザンハビネッツがハブとなり、食材・備品寄付の仕組みを構築し運営費を抑えられるよう支えあう
- 行政や社会福祉協議会等とも連携し、対象世帯へ開催情報を周知



PoC

“支援の輪”を広げ、持続可能な運営を支えあう

- 全国から全25社が食堂運営費を支援。内3社はバスケットボール事業には関係ない支援寄付を受けた“規格外の野菜”を中心に、管理栄養士が栄養素を考え日替わりでメニュー提供
- 秋田市以外でも、出張こども食堂を1か月に1回程度実施（由利本荘市、にかほ市）
- 地元調理師会と連携。季節のイベントを開催し、食材の売価を低くする工夫



事業開発

“地域連携”により、こどもたちの笑顔を中心とした地域コミュニティを築く

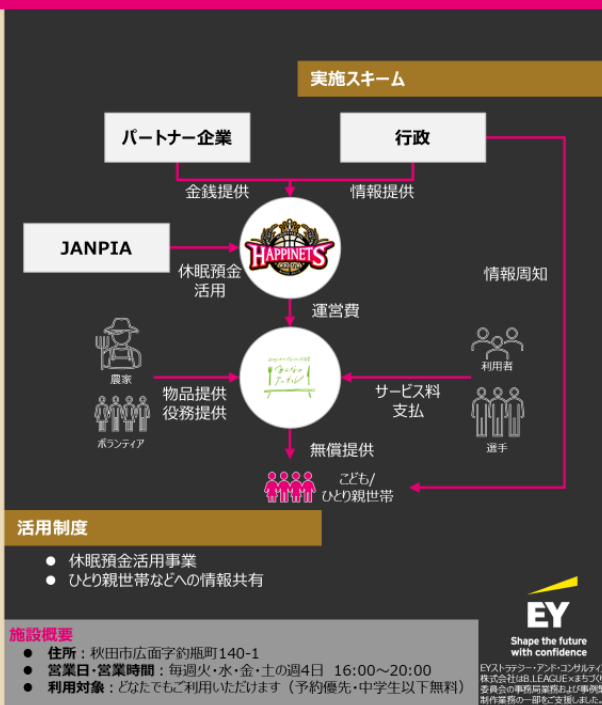
- 高校生～70代までの幅広い地域の方が、約40名ボランティアとして活動
- 秋田市と連携し児童扶養手当受給世帯約2,500世帯に専用の無料招待チラシを配布
- 所属選手やスタッフなども、こどもたちや地域の方との触れあひ貴重な場になっている
- ホームゲームでもフードドライブを実施し、食材や本の寄付を募り持続可能な運営に繋げる



事業育成

クラブが“課題と課題”を結び付け、新たな価値を創造

- 障がい福祉施設と連携し、耕作放棄地の畑を整備、地元小学校の授業の一環として、野菜の苗植え体験等を通して、こども食堂の食材となる野菜を栽培
- 秋田ノーザンハビネッツが運営する「秋田あけびーる」の、ビール醸造過程で出る“麦芽カス”を乾燥させ、畑の肥料として使用。産業廃棄物削減効果もある



横展開可能な仕組み作り



秋田ノーザンハビネッツ
経営企画室 小原 諒平

- ノーザンハビネッツのバスケットボール以外のビジネス拡大
- 他地域でもかつ横展開可能な仕組み作り



社会福祉法人秋田県社会福祉協議会
地域福祉・生きがい振興部 柴田 伝 様

公民連携のポイント

- 人材連携
- 法制度・許認可
- 財源
- 土地の所有・管理
- 施設の所有・管理
- 運営方針
- 市民との合意形成
- リスク管理
- 広報・PR

みんなのテーブルを支える熱血担当者とのつながり

こども食堂を立ち上げようとした時の課題感で記憶に残っていることは、運営ノウハウもなく、横の情報連携の繋がりがなかったことで、本当のように始めたらよいのかと手探りの状態でした。その中で、県社協さんに訪問させていただき情報交換から始め、実際に運営されている団体を紹介していただくことで、徐々に運営のイメージを掴んでいくことができました。立上げ当初から、あらゆる場面でご協力いただいています。

秋田県社協を通じた県内のこども食堂連携

スポンサーと連携した県内のこども食堂支援も、県社協の皆様が全体の課題を把握し、事前にご共有いただいたからこそ理解が得られ、実現できたと思っています。その他、ボランティア受け入れの調査や他のこども食堂との連携の際にも、県社協の皆様にも幅広くご連携いただいているのでとても感謝しています。

秋田ノーザンハビネッツモデルを全国へ

秋田県内では、昨年から3リーグのブラウブリッツ秋田でもこども食堂の運営がスタートしました。秋田ノーザンハビネッツモデルの企業やファンを巻き込むチカラを発揮した運営が、全国のBクラブを始めとする様々なプロスポーツチームへと広がり、全国各地でこどもたちの未来へ繋がる活動になることを望んでいます。

あきた子ども応援ネットワークの立上げとみんなのテーブル

令和2年から「あきた子ども応援ネットワーク」の立上げを準備しており、令和3年から運営をしています。初めて秋田ノーザンハビネッツさんがご相談に来られてからは着々と準備を進めていっていった記憶があります。

全国こども食堂支援センター・むすびえの情報交換でハビネッツさんの取組を紹介したところ、プロスポーツチームが運営することも食堂は全国初の事例でした。

みんなのテーブルから広がる支援の輪

県内のこども食堂を運営される方々に課題をヒアリングすると、肉や魚といった食品の確保が難しく、もっとこどもたちに食べさせてあげたいという話を聞いていました。秋田ノーザンハビネッツさんからは、ボークランドグループ様を通じて桃豚（豚肉）のご提供をいただけており、県内の団体さんをもとても喜んでいて、ハビネッツさんだからこそ実現できたと思います。

県内唯一の常設こども食堂なので、ネットワークとしてできる限りの協力を継続していただいています。

B.CLUBとの公民連携の秘訣

お互いのできることの強みを活かした連携をしていくこと。特に情報の発信力がハビネッツさんの強みですので、それを活かしながらネットワークでできることに取り組むこと。